

令和六年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

私が(1)なりわいとしている文化人類学は、「フィールド」と呼ばれる調査地に出かけてゆき、そこに長期間住みこんで、人びとの暮らしについて調査をするという学問だ。人びとの暮らしや考えていることを理解するためには、その土地の言葉がでなくてはならない。少なからぬ人類学者は、日本であらかじめ調査地の言語を勉強してから調査に出かけるのではなく、とりあえずフィールドに入り、そこで暮らしながら少しずつ言葉を学んでいく。私自身もそんな風にして、これまでタンザニアやガーナ、南インドで調査を行ってきた。

大学院の修士課程に(a)在籍していた頃、同じく人類学者の卵としてモンゴル研究をしていた友人と、「(2)日本でも思わず現地語が出てきちゃうケース」について語りあったことがあった。モンゴル語では、「ハッ」と息を吸い込むあいづちがあるらしく、彼女は日本語で会話をしている最中にも、「思わず『ハッ』ってやっちゃうことがある」という。私も同じく、舌で口蓋を「タッ」と軽く打つあいづちがひよっこり出てしまうことがあった。驚いたときの「エイ！」といった間投詞も、現地語が「思わず出ちゃう」ケースに含まれる。日本語で話しているにもかかわらず、なぜそんな表現が飛びだしてしまうのか。それは、それらが言語というよりも声、もつといえれば身ぶりに近い表現であって、だからこそフィールドに滞在しているうちに、人類学者の身体に深く染みこんで離れないものになるからではないだろうか。ある土地に暮らしながら言葉を学んでいくとき、言葉は常に声であり、身ぶりであり、やりとりの中にある。それをまるごと学んでいくことは、人びとの声音や身ぶり、やりとりの作法を学ぶことだ。そのとき、「学ぶ」ことはまさに「まねる」ことであり、身体的な行為にほかならない。A長

期の調査から戻って間もなく、頭では日本にいるとわかっていても、身体はまだフィールドの感覚のままであるとき、とっさに出てくる間投詞が現地語になってしまふのだろう。

B 現在中学三年生の長女は(b)目下、受験英語と格闘中である。文法を覚え、単語を覚え、英文和訳し、和文英訳し……と奮闘している娘をみていると、「ああ、こういうの私もやったな」と懐かしく思う一方で、自分が中学生だった頃と学習方法がほとんど変わっていないことに驚きもする。最近でこそ、読み書きだけではなく「聴く・話す」能力も重要云々といわれているが、それでも中学校で学ぶ英語は基本的に、頭で覚えて問題を解くという I の教科であることには変わりがないらしい。それはさつき書いたような、ある言語を話している人たちと暮らし、必死にやりとりしながら、からだ全体を使ってその言葉を「まねる・学ぶ」方法とは II であるようにみえる。とにかくやりとりする、

令和六年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

というⅢで野蛮な後者の方法では、「私が理解すること」よりも「お互いが了解すること」、「頭でわかること」よりも「腑に落ちること」の方が重要になる。そんなやりとりには、その場の状況、相手との関係性、言葉のリズムや話しだすタイミングなどのすべてが関わっている。それは言語の「学習」というよりも、相手との間に身体的・感覚的なかわりをつくりだすことだ。

(3) ガーナの村に住んでいたころ、よく耳にするにもかかわらず、意味のわからない単語があった。ある日、近所の子どもと一緒に幹線道路の端を歩いていたら、ミニバスが私たちの横スレスレを猛スピードで追い抜かしていき、(4) 肝を冷やしたことがあった。そのとき、その子がさかさずバスに向かって拳を振り上げ「クワツシア！」と叫んだのを見て、私は悟った。クワツシア「バカ」だったのか。

そんな風に、ある状況の中で発せられる言葉を、声音や身ぶりや表情といっしょに全身でまねて／学んでいるうちに、だんだんと自分の思考や独り言や夢の一部が現地語のそれになってくる。それは、単に語彙が増えた、文法がわかってきた、という以上に、自分の身体感覚、ひいては身のまわりの世界や他者との関わり方が少しずつ変化していることを感じる段階だ。ある言語が「自分のものになっていく」という感覚をもつとき、同時に私はその言語の語彙や、リズムや、やりとりが生みだしつづける独特な世界の網の目の中に少しづつ取りこまれている。

雪の多い土地で、雪を表現する語彙が豊富だというのは有名な話だけれど、私はガーナで暮らすうちに、さまざまな儀礼や霊的存在に関する語彙の豊かさを知ることになった。私自身の研究テーマがそうした土着の宗教実践だということにもよるが、英語や日本語には簡単に翻訳できない、豊かで多義的な語彙を学び、同時に儀礼や呪術の実践にふれるうちに、私はいつのまにか呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめている自分に気づいた。ガーナの村で、「オボソン」と呼ばれる精霊について語りあうことは、外側からそうした「お話」の世界をⅣすることではなくて、精霊や呪術師が(c)躍動している現実世界に全身で参入し、その世界を生きることもある。それは、αのように、異文化の言葉や概念が自文化の言葉や概念にスムーズに置き換えられることを前提とした言語の学習とは異なり、自分の身体感覚や世界認識そのものが揺らぎ、Ⅴしていくような経験だ。だから、人類学のフィールドワークは楽しくもあり、ときに非常に疲れる体験でもある。

人類学者のタラル・アサドは、「文化の翻訳」をテーマとした論文の中で次のように書いている。人類学者が調査地の言語を母国語に翻訳しようとするとき、彼／彼女は一組の文と文を対応させるようなⅥな翻訳を行うのではない。C、現地の人たちの語りが常に論理的にみえるように、都合のよい解釈を(d)施しているのではない。Dそれは、フィールドでの生活を通して異なる言語や思考

令和六年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

のあり方を学び、それを自国の人びとに伝えようと試みる中で、人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるような翻訳なのである、と。

言葉は何よりもまず声であり、リズムであり、やりとりであるのだから、それを学ぶには全身で他者や世界と関わり、とっくみあわなくてはならない。その過程で、私は言語を自分のものにしていくと同時に、その語彙や身ぶり、リズムが織りなす世界に取りこまれていく。私の β はそのとき、母国語と現地語を（e）媒介するものになる。現地語の世界に没入し、そこに生きる「私」に変身しながら、母国語でフィールドノートをつけるとき、そこには常に「没入（変身すること）」と「再帰（我に帰ること）」の往復運動がある。そんな風に没入と再帰をくりかえしていくうちに、自分自身がしだいに根底から変容してゆき、ついにはどちらが「我」で、どちらが「変身」なのかもわからなくなってくる。日本に戻って、日本人の学生としてふるまっているつもりでも、思わず口から飛び出す「ハッ」というあいづちとともに、長く暮らしたフィールドでの「私」がふいに蘇（よみがえ）ってくることもあるのだ。からだ全体を使って、身ぶりやリズム、やりとりとしての言葉を身につけることはだから、常に変わらない「この私」が異文化の言語を知り、理解し、習得する、といった一方的なプロセスではない。そうではなくて、（5）それは変身の経験、別な世界に生きる「私」の生成であると同時に、その世界によって「私」が少しずつ知られ、のっとられていくような経験でもあるのだろう。

（出典：石井美保「アカン語——あいづちと変身」『わたしの外国語漂流記——未知なる言葉と格闘した25人の物語』河出書房新社・二〇二〇、出題の都合上振り仮名及び空白行を削除したところがある）

令和六年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意 答えはすべて解答用紙に記入すること】

問一 傍線部(1)「なりわい」、(4)「肝を冷やした」の意味として適当なものを、次の(ア)～(エ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- 傍線部(1) (ア) 趣味 (イ) 仕事 (ウ) 得意技 (エ) 研究主題
傍線部(4) (ア) 驚き恐れたこと (イ) 嘆き悲しんだこと (ウ) 傷つき腹を立てたこと
(エ) 寂しく惨めに感じたこと

問二 波線部(a)～(e)の語の読みを書け。

問三 傍線部(2)「日本で思わず現地語が出てきちゃう」とあるが、そのようなことが起こるのはなぜか。筆者の考えに沿って簡潔に説明せよ。

問四 空欄 A ～ D を補うのに最も適当な語を、次の(ア)～(オ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- (ア) しかし (イ) あるいはまた (ウ) だから (エ) むしろ (オ) ところで

問五 空欄 I ～ VI に入れるのに最も適当な語を、次の(ア)～(エ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- | | | | | |
|--------|----------|----------|----------|----------|
| 空欄 I | (ア) 現場 | (イ) 机上 | (ウ) 理想 | (エ) 実践 |
| 空欄 II | (ア) 敵対的 | (イ) 整合的 | (ウ) 相補的 | (エ) 対照的 |
| 空欄 III | (ア) 慎重 | (イ) 穩当 | (ウ) 無謀 | (エ) 輕率 |
| 空欄 IV | (ア) 觀察 | (イ) 体験 | (ウ) 構築 | (エ) 支配 |
| 空欄 V | (ア) 不安定化 | (イ) 不活性化 | (ウ) 不平等化 | (エ) 不特定化 |
| 空欄 VI | (ア) 創造的 | (イ) 機械的 | (ウ) 恣意的 | (エ) 自動的 |

問六 傍線部(3)「ガーナの村に住んでいたころ、よく耳にするにもかかわらず、意味のわからない単語があった」とある。この単語を例に、筆者の言語習得の特徴を簡潔に説明せよ。

問七 空欄 α ・ β に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問八 傍線部(5)「それは変身の経験、別な世界に生きる「私」の生成であると同時に、その世界によって「私」が少しずつ知られ、のっとられていくような経験でもある」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

令和六年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意・答えはすべて解答用紙に記入すること】

□ 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

仙川は咳^{せき}ばらいをした。

「花の中には、日差しに弱い種類がある。ラベンダーやフクシア、能登半島のキリシマツツジなんかそうだ。ところが松は、①シユウイに②ゼツミヨウな日陰を作ってくれる。だから松の木の下にそうした日差しに弱い花を植えると、きれいな花を咲かせることができる。庇護^{ひご}を求めるか弱き存在の者のために、自ら日陰を作って立つ――それが医療者というものだ」

感心して聞いていると、店の外から騒がしい音とともに麻世が入ってきた。

「遅いよ。こっちこっち」

野呂が手招きして席に着かせる。

「これ、見てくださーい」

麻世は大量の洋服を買い込んでいた。カツラや③ケシヨウ品もある。

訪問治療を受けつつ、抗癌^{がんが}剤治療をしている子宮癌の患者が、「思いつきりおしやれて過ごしたい」と言うから、リクエストの品を買い集めてきたのだという。

「メガドンキの隅々まで④ダンサクしたんです。ああ、疲れたあー」

咲和子は、ふいに目がうるむ。在宅医療というのは、こういう気持ちの集合でできる医療なのだ、と。最後の日まで、いかにその人らしく生きるか――そうした毎日を支える存在になろうと、皆がそれぞれに考えている。

徹底的に生きたい人には、最新医学も視野に入れた手段で治療をする。その一方で、苦しくない⑤シユウマツ期の日々を支えるケアも行う。患者に合わせて、自由度の高い対応ができるのがまほろば診療所の在宅医療だ。

にぎやかな声に包まれながら、咲和子は松のミニ盆栽を手にする。誰かのために日陰を作る。これが自分たちのめざす姿なのかと改めて感じつつ。